

## 第一編 總 說

京都の地に帝國大學の創設せられたことは、明治三十年にあり、東京帝國大學が明治十年四月を以て創立とするの後、恰も二十年にあたる。而してわが文學部は、はじめ京都帝國大學文科學部と稱し、明治三十九年九月に開講せられ、大正八年京都帝國大學文學部と改稱せられて今日に至つた。その創立の時は日露の戰雲戢さまり、東亞の天地に平和の光滿ち、國運まさに興隆のときであつて、文化の上には新氣運の鬱乎として昂まり來るの際にあたつてゐた。

かくてわが文科學部は、山紫水明の自然と、日本文化のながき傳統とをもつ京都の地に興り、人文諸科學の精髓を攻究するの學府として設けられ、その創立に於て、すでに荷ふべき使命の重くして、且つ維れ新<sup>あたら</sup>たなるものがあつたのである。

京都の文科大学がその開設にあたつて、既設の東京帝國大學の文科大学の諸體制に對して特色あるものをつくらんとする意圖の強くあり、またこれに應じて獨自なる内容を有つに至つたことは、これまた自らに考へらるべきであつて、後日、世に京都學派の名を以てした學風の興ることは、基くところすでに夙くにあつたと謂へるであらう。

かくのごとくにして文科大学の開設は、京都帝國大學の初代總長法學博士木下廣次氏の時にあつた。木下總長は明治三十年六月就任以來、その高邁の識見と、古武士のごとき風格とを以て、よく大學創業の功を成し、文科大学の開設によつて、その初めに企畫せられた綜合大學の組織を完成し、文科大学開講の後一年にして、明治四十年七月、疾によつて職を辭せられた。

その後をうけて理學博士久原躬弦氏總長事務取扱となり、やがて岡田良平氏總長として同年十月來任し、事務的才幹を以て大學行政にあたり、職にあることほゞ一年にして文部次官に任せられ、次いで理學博士男爵菊地大麓氏、明治四十四年九月、總長に就任し、寛厚の風を以て大學を治め、同四十五年五月樞密顧問官

に任せられた。その後總長には、理學博士久原躬弦氏(明治四十五年五月)、澤柳政太郎氏(大正二年五月)、醫學博士荒木寅三郎氏(大正三年四月)、理學博士山川健次郎氏(兼任大正三年四月)、醫學博士荒木寅三郎氏(事務取扱大正三年四月)、理學博士新城新藏氏(昭和四年三月)、文學博士小西重直氏(昭和八年三月)、法學博士山本美越乃氏(事務取扱昭和八年六月)、相つぎ、昭和八年七月には現總長理學博士松井元興氏の就任を見るに至つた。

この間文科大學にあつては、狩野亨吉氏學長として草創の時に力を盡し、明治四十一年十月辭職の後をうけて教授文學博士松本文三郎氏學長となり、職にあること八年、學制の整備に意を用ひ、その後、藤代禎輔、狩野直喜、原勝郎、坂口昂、小西重直、藤井健治郎、濱田耕作、羽田亨の諸教授相ついで部長に補せられ、みな銳意わが學部の充實、發展に力を致し、昭和九年十月現部長野上俊夫氏これに補し、開校以來實に十一代にして三十周年を迎ふるに至つたのである。

教授にあつては、明治三十九年四月文科大學開設にあたつて、狩野亨吉、谷本富、狩野直喜、松本文三郎、桑木嚴翼の五氏開設委員となり、やがて教授に任せられ、ついで松本亦太郎氏教授に任せられ、その後史學にあつては文學博士内田銀藏氏

教授となつて史學科の開設に與かり、文學科においては、狩野直喜教授が開設委員として哲學科の開講と同時に任せられ、翌年、藤代禎輔氏教授に任せられた。

かくて明治三十九年九月哲學科まづ開講し、翌四十年九月史學科開講し、その翌年の四十一年九月に文學科の開講するに至つて文科大学の三學科は完成し、その鼎立の組織は文學部と稱する今日に於ても持續するところである。

かくて明治の時代過ぎ、大正の代となるとき文科大学の諸制こゝに充實し、講座に於ては、その數二十四、教授十八名、助教授十名、その他講師としてその専門の學を講ずるもの十九名の多きを有ち、鬱然として西日本に於ける文教の叢林たるに至つた。而して現在、昭和十年に於ては、講座三十二、教授二十三名、助教授十四名、講師四十九名がある。學生の數に於ては、哲學科第一回入學者は學生十六名、選科生十七名であり、史學科第一回入學者は學生十一名、選科生二名であり、文學科第一回入學生は學生十三名、選科生八名を算したに過ぎなかつたが、大正の末年より昭和時代に入つては、哲・史・文三學科の入學者、合せて毎年二百十名を超えることを常とし、現在の學生總數六百五十三名あり、大学院にあつて研究に従



事するものまた二百九十六名を有するの状況にある。而して卒業生はすでに二千四百六十六名を出し、それぞれ邦家文教のために活動するところである。

その他、學風にあつては、創立の時以來育成せられた清新にして自由なる風は、三十年の間、斷ゆることなくうけつがれて勝れたる業績を産み、京都大學の學問は、學界に搖ぎなき地位を確保するに至り、なほ將來に輝かしき發展をなすべきものを藏してゐる。



古板・大學附近繪圖

尾州屋敷のあるところは今、大學本部構内・文學部またその内にあり

